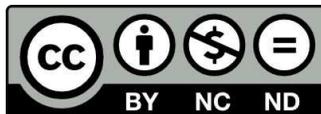


# 日本IT書紀

071 P L A N & D O

04 含牙篇  
卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十一

PLAN&DO

一

インパール作戦が開始されて一か月後、一九四三年の四月に進水した超大型航空母艦「大鳳」は、全長二百六十メートルの甲板を備え、艦上爆撃機、戦闘機など五十機以上を艦載できる格納力を持っていた。

甲板に鉄鋼を張った甲装仕様で、高度三千メートルからの八百キロ爆弾もしくは一二〇〇メートル離れた場所からの六インチ砲直撃にも耐えられる能力があった。魚雷攻撃を受けて浸水しても、限定区画で被害を抑え、全体のバランスを取る仕掛けが施されていた。

ジリジリと追い詰められていた連合艦隊にとっては、起死回生の特効薬にも似た「不沈空母」が登場した。兵員輸送と航行訓練を兼ねて呉↓シンガポール↓リンガ↓タウイタウイ↓ギラマスと航行し、六月十八日、マリアナ沖海戦に臨んだのが初の実戦参加だった。

翌十九日の海戦で午前八時十分過ぎ、アメリカ潜水艦

「アルバコア」が放った魚雷六本のうちの一本が右舷前方に命中した。このとき積載していた航空燃料の管に亀裂が入った。燃料は気化して密閉された区画に充満した。

午後二時半過ぎ、帰還した攻撃隊の一機が胴体着陸した瞬間に大爆発が起こった。懸命の消火活動が続けられたが、午後四時半、左舷に大きく傾斜し沈没した。就役からわずか二か月半であっけなく海の藻屑となってしまった。

海軍にはもう一つの不沈空母があった。いや、潮岬沖で沈没した超弩級空母「信濃」のことではない。ここでのいうのは鳥のことである。

源田實という中佐がいた。

ミッドウェー海戦（一九四二年六月）、第二次ソロモン海戦（四二年八月）、マリアナ沖海戦（四四年六月）、エンガノ沖海戦（四四年十月）などで、連合艦隊は多くの空母を失った。ばかりでなく、南太平洋や東シナ海、日本近海を航行しているときにも米潜水艦の標的となった。

大本営は急ピッチで「雲龍」型中型空母、「伊吹」型重巡空母を建造したが、その完成を待っていることはできなかった。

——空母が足りないなら、島を空母と見立てればいいではないか。

と源田は思いついた。

「不沈空母」構想である。

それはいまさらの話ではなく、一九四二年（昭和十七）の早い段階で着想されていた。

マリアナ諸島、パラオ、ニューギニア、フィリピンを結ぶ海域を「内南洋」とし、そこに浮かぶ島嶼に航空基地を建設する。そこに配備した基地航空部隊をもって空母部隊と同様の航空作戦を展開するといのである。ミッドウェー島がその最初の候補だった。

ミッドウェー島の攻略は失敗したが、源田の構想は着実に実行されていた。

トラック、テナアン、サイパンといった島々に第一航空艦隊（一航艦）の航空部隊が配備され、四四年二月の時点では計十三の航空隊が編成されていた。計画では最新鋭の戦闘機、爆撃機計一千六百二十機が配備されるはずだったが、航空機の生産が追いつかなかった。

このため現地の航空部隊は、墜落したり破壊された航空機の残骸を組み合わせて、どうにか戦闘機らしき航空機を作り出した。また大本営は旧式の戦闘機や爆撃機をかき集め、機数だけは計画を達成した。ところが今度は輸送船と搭乗員が足りなかった。

マリアナ沖海戦、エンガノ岬沖海戦が行われた一九四四年は、インパール作戦の停止（失敗）、サイパンの陥落と、

日本軍の劣勢がはっきりした年だった。欧州戦線ではイギリス空軍がドイツを爆撃し、ドイツ軍がクリミア半島から撤退、連合軍がノルマンディに上陸と、第二次世界大戦そのものが攻守転換した年でもあった。

弱り目に祟り目ということではなく、劣勢に立ったとき内包していた弱点が噴き出してくる。日本軍ないし大日本帝国にあつては、情報の処理と評価の問題だった。どのように情報を入手するか、入手した情報をどう分析するか、分析した結果をどう活かすか、実施した作戦の成果をどのように評価するかである。

一般に、企業経営やプロジェクト管理の基本的な手法とされる「PLAN&DO」は、PLANの前にAS-ISの分析が、DOのあとにCHECK（評価）がなされる。そのうえで適切なAction（実行）がある。いわゆるPDCAは、Cにこそ重きを置かなければならない。

さらにいうと、すべての前提となるAS-ISは客観的で正確な「事実」に基づかなければならない。主観的な感想、希望的観測、「べき」論や「だったら」の仮定、周辺関係者への配慮や忖度などを一切排除し、事実を事実として受け入れることからスタートする。

DOのあとのCHECKも同様である。信頼性のある情

報が適正な手段で入力され、正しい方程式で数値化され、その結果は冷静かつ批判的に受け止めなければならない。このとき「べき」論や「だったら」の仮定は有効に作用することもあるのだが、決してその前提とはなり得ない。

だが日本軍は、そのすべてに「大和魂」と「根性」を当てはめた。その典型的な例は、四四年十月十二日から十六日にかけて、波状的に展開された台湾沖航空戦である。

## 二

マリアナ沖海戦（あ号作戦）に完敗した日本海軍は、最後の決戦「捷号作戦」を立案した。フィリピン方面を意味する捷一号、九州南部から台湾島にかけて展開する捷二号、本州・四国・九州および小笠原諸島の死守をねらった捷三号、北海道を防衛する捷四号である。

アメリカ軍はフィリピン（ルソン島）再上陸を予測させる活動を頻繁に示していた。いわゆる「キングⅡ作戦」である。ミンダナオ島奪還計画（キングⅠ作戦）に続くものだった。ソロモン↓ニューギニア↓モロタイと兵を進めてきたので、次はルソン島ということは容易に推測できた。

そこで捷一号が発動された。公式記録による作戦発動日は四四年十月十八日とされる。しかし台湾沖航空戦が行わ

れたのは四四年十月十二日から十六日の五日間、その図上演習が始まったのは七月二十三日、「捷号作戦」のために第二航空艦隊（二航艦）が創設されたのは六月十五日にさかのぼる。

捷一号のねらいはウイリアム・ハルゼー大將率いるアメリカ海軍機動部隊第三十八機動部隊の殲滅とされた。各航空部隊から搭乗員を集め、昼間攻撃隊、薄暮攻撃隊、悪天候下でも攻撃可能な「T攻撃部隊」が編成された。福留繁中將を司令官とし、海軍爆撃機「銀河」、艦上攻撃機「天山」、陸軍爆撃機「飛龍」など千二百五十一機である。

十月十二日、アメリカ第三艦隊の航空機千三百七十八機が台北を空襲した。四三年十一月二十五日、中国・江西省遂川（Suchuan）から飛来した十四機のB-24による新竹爆撃以来の空襲だった。

「ハルゼー艦隊現わる」

の報で、同日の薄暮、約百機が出撃した。曇天の日暮れで照明弾の効果が出なかった。アメリカ側の対空砲火で五十四機が未帰還となった。

翌十三日にもアメリカ第三艦隊は約九百五十機が台湾を空襲した。このときも薄暮攻撃に二十八機が出撃した。アメリカ第三艦隊は日本軍の暗号を解読していて、連合艦隊司令長官・豊田副武大將が台湾の新竹基地に滞在している

ことを掴んでいた。

山本五十六がソロモン上空で撃墜死、古賀峯一はセブ島で遭難死と、連合艦隊司令長官は二代続いて不遇の死を遂げていた。豊田を空襲で死ぬようなことがあったら、二航艦の責任は限りなく重い。

ということから、福留中将は十四、十五、十六と連日の索敵、追撃に専念した。ばかりでなく連合艦隊司令部は第五艦隊（支那方面艦隊…重巡洋艦「那智」「足柄」などで編成）に追撃命令を出していた。

十二日の未帰還五十四機を含め、五日間で日本軍が被った損害は三百十二機、出撃した六百四十四機に占める損失率は四八・四％に達した。連合艦隊司令長官の滞在、乾坤一擲の大戦果への意欲、戦況転換への希望的観測といった様ざまな要素が錯綜した。豊田長官に大戦果を報告しなければならぬ。

このときの戦果を日本軍司令部は次のように評価した。

12日 空母六ないし八隻を撃沈

13日 空母三ないし五隻を撃沈

14日 第一次攻撃隊ハ空母三

第二次攻撃隊ハ空母二二夫々相当ナル損害ヲ与ヘ

得タルコト确实

15日 轟沈 戦艦一

撃沈确实 大型空母一、小型空母一、甲巡洋艦一

沈没ほほ确实 小型空母一、戦艦一、乙巡洋艦一

「戦果」を合計すると、アメリカ艦隊は少なくとも空母十一隻、戦艦一隻、巡洋艦一隻を失ったこととなる。ということは、アメリカ第三十八機動部隊は消滅したはずだった。

大本営発表

十月十五日十五時付

台湾東方海面の敵機動部隊は昨「」日東東方に向け敗走中にして、我が部隊は此の敵に対し反覆猛攻を加へ戦果拡充中なり。現在までに判明せる戦果（既発表のものを含む）左の如し

轟撃沈 航空母艦七隻 駆逐艦一隻

（註）既発表の艦種不詳三隻は航空母艦三隻なりしこと

判明せり

撃破 航空母艦一隻 戦艦一隻 巡洋艦一隻

艦種不詳十一隻

十七日十六時付

我航空部隊は明十六日台湾東方海面に於て新たに来接せ

る敵機動部隊を追撃し、航空母艦、戦艦各一隻以上を撃破せり

十九日十八時付

我部隊は十月十二日以降連日連夜台湾及「ルソン」東方面の敵機動部隊を猛攻し其の過半の兵力を壊滅して之を潰走せしめたり。

(一) 我方の収めたる戦果綜合次の如し

轟撃沈 航空母艦十一隻 戦艦二隻 巡洋艦三隻 巡洋

艦若は駆逐艦一隻

撃破 航空母艦八隻 戦艦二隻 巡洋艦四隻 巡洋艦

若は駆逐艦一隻 艦種不詳十三隻

撃墜 一一二機 (基地における撃墜を含まず)

(二) 我方の損害飛行機未帰還三二二機

(註) 本戦闘を台湾沖航空戦と呼稱す

これに対して、大本営や海軍軍令部の内部に再調査の必要を指摘する声がないではなかった。ところがそうした声は

「消極的である」

「国民の士気を喪失させるものである」

という理由で無視されてしまった。

あまつさえ、

——残敵を掃討し、敵損傷艦を拿捕すべし。

という命令まで出した。のちに権力サイドが流す偽情報  
の代名詞となった「大本営発表」である。

赫々たる大戦果ではないか。この報道に日本国民は歓喜した。「日本軍の反攻が始まる」と喧伝された。

三

十月十六日、台湾から飛び立った索敵機が台湾東方四百三十哩の海上に空母七隻からなる敵機動部隊が航行しているのを発見した。この知らせは大本営を大混乱に陥れた。恐慌をきたしたといつていい。

翌十七日になると、今度はフィリピン島レイテ湾沖に米海軍機動部隊約十隻が姿を現わした。そればかりか総艦数七十隻にも達するアメリカ海軍第三十八任務部隊が、海面を埋め尽くしているのが発見された。この時点で初めて、大本営は台湾沖航空戦の戦果にとんでもない誤認があったことを知った。

このとき、第三艦隊司令長官ハルゼーは、旗艦ニュージヤージーからニミッツ (太平洋艦隊司令長官兼太平洋戦域最高司令官) に宛てて

——近頃、ラジオ東京が全滅したと報じた第三艦隊の艦船は、海中から引き揚げられ、日本艦隊に向けて高速で撤退中。

——という電報を發していた。

台湾沖航空戦の戦果は、帰投した攻撃機搭乗員の報告に基づいていた。

——彼らは口々に

——爆弾が空母に命中した（と思つ）。

——炎上しているのを見た。

——と報告した。

いくつかの報告は正しかったが、多くは想像であったり見間違えであったりした。機関を全開にして回避行動を取る艦隊が吐き出す重油の煙を、命中弾による火災と勘違いしたこともあったらしい。

——この報告を鹿屋基地参謀が都合よく解釈した。

——だけでなく、搭乗員の質問に当たった将校たちが誘導的な尋問を行った。

——敵艦からあがる煙は、味方の爆弾が当たったものではないか？

——と訊ねられ、初年兵は

——かも知れません。

——と回答した。

——いや、違うと思います  
——と答えることができない圧力があつた。  
——すると

——爆弾が命中したものと認める。

——ということになった。

——その繰り返しが行われ、

——命中弾三発であれば中破ないし大破と考えてよからう。

——さらに火災が発生していれば沈没したかもしれない。

——いや沈没したのであろう。

——ということになって行つた。

開戦から一、二年のころは猛特訓を受けた戦闘機乗りがいくらでもいて、戦果を厳しく評価することが教育されていた。ところが戦局が劣勢になつていたこともあつて、希望的観測が安易に入り込んだ。

——ミッドウェー海戦のあと、大本営は

——「希望的観測に基づいて戦果を評価しないように」

——と全軍に通達していたが、苦戦を強いられていた最前線では少しでも希望を見出そうとし、また各軍の司令本部も「戦果」を強く求めていた。大本営の通達は事実上、反故になつた。

——情報の収集と評価はきわめて恣意的であつて、その集積

を綿密かつ客観的に分析する作業は全く行われなかつた。現今の成果主義がもたらす弊害と相通じるところがある。

この戦果誤認がもたらした被害は、大きかつた。

四四年十月二十三日から二十六日にかけて行われたフィリピン沖海戦は、アメリカ太平洋艦隊の主力は消滅した、という前提で立案されていた。マリアナ沖海戦と同じ過ちを海軍軍令部は犯したことになる。

台湾沖航空戦に攻撃機を動員したため、フィリピン航空部隊の稼働機数は三十五機に減っていた。航空機の援護がないまま、連合艦隊はフィリピン沖海戦（レイテ沖海戦とも）十月二十二日・スリガオ海峡海戦、同二十四日・シブヤン海海戦／エンガノ岬沖海戦、同二十五日・サマール沖海戦の総称）で空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千歳」「千代田」、戦艦「武蔵」「扶桑」「山城」のほか艦船三十を失い、南方艦隊は壊滅してしまつた。

かつ、フィリピン駐屯の山下奉文率いる陸軍第十四方面軍が連合軍に降伏して以後、アメリカ軍はB-29による日本本土空襲を楽々とできるようにした。日本軍がミッドウェー島を足がかりにアメリカ本土を爆撃しようと考えたことを、今度はアメリカ軍が実行する番だつた。

だけでなく、アメリカ軍は日本軍が作ったゲラム、サイパン、テナンの飛行場を拡張して大型爆撃機が離発着で

きるようにした。「不沈空母」化したのである。源田の構想を逆手に取つたともいえるし、戦争である以上、アメリカが同じことを考えたとして少しもおかしくない。

#### 四

興味深いのは、アメリカ海軍は南西太平洋方面最高司令官ダグラス・マッカーサーに「エレクトロン作戦」の自己検証を求めていたことである。エレクトロン作戦は太平洋の島々を占拠している日本軍を放置（無視）して、ニューギニア島↓ルソン島↓台湾島と、飛び石式に軍を進めることに狙いがあった。

マッカーサーはB-29の実戦配備やマンハッタン計画のことを承知していたので、少しでも早く日本に白旗を上げさせたかつた。それは新婚旅行で訪れた日本に大量の爆弾を落としたり、大勢の日本人を殺害することを忌避したかつたばかりはなく、アメリカに最終的な勝利と世界に平和をもたらした將軍として歴史に残ることを求めていたためだつた。

実際、マッカーサーは陸軍参謀本部に予想される詳細なスケジュール（予定）を提出していた。「レノ計画」がそれで、キングII作戦の着手（ルソン島リングエン上陸・四

五年一月六（九日）は予定より四十日も早かった。

このときからポツダム宣言無条件受諾から四日後の八月十九日まで、ルソン島ではウォルター・クルーガー中将麾下のアメリカ陸軍第六軍と山下奉文大将麾下の日本陸軍第十四方面軍の間で血みどろのジャングル戦が繰り広げられた。

書きそびれたのは、台湾沖航空戦における日本軍航空機の損失である。投入した航空機は延べ六百四十四機に及び、損失は三百機を上回った。それだけでなく、この攻撃では第二十六航空戦隊司令官・有馬正文少将自らが一番機に乗り込み、敵空母にめがけて突撃、自爆している。

有馬の自殺行為は彼個人の死のみを意味しなかった。二百五十キロ爆弾を装着した航空機を敵艦船に突入させる特別攻撃、いわゆる「特攻」が正規の作戦として組み込まれ、以後、無為な死が積み重ねられていく。

十月二十日、アメリカ軍がフィリピンに上陸し、マッカーサー大将が「自由の声」放送で

「アイ・ハブ・リターンド」（わたしは帰ってきた）と放送した。コレヒドール要塞から脱出したときに発した「アイ・シャル・リターン」に対応させた言葉だった。

十月二十四日、「大和」の姉妹艦として建造された「武蔵」がフィリピンのシブヤン湾に沈没した。アメリカ軍の攻撃機二百六十四機が五波にわたって殺到し、魚雷十五本、爆弾二十発を命中させた。世界に誇った四十六センチ砲は、一度も戦艦決戦に使われることがなかった。

十一月五日から十一日にかけて、ブーゲンビル島沖で激しい航空戦が展開された。日本海軍は航空機百七十八機、搭乗員七百二十八人を投入し、百二十一機と約四百人が失われた。

一九四五年三月一日、硫黄島の日本軍が全滅した。戦死者は日本軍の約二万二千に対し、アメリカ軍は約二万五千人に達した。アメリカ海兵隊の戦死者数が守備隊の戦死者数を上回ったのは、硫黄島の戦いが唯一である。

三月十日、東京の夜空をB-29の大編隊が覆い、大量の焼夷弾と爆弾を投下した。ゲーム、サイパン、テナンの三航空基地から飛び立った計三百三十四機が投下した爆弾と焼夷弾は二千トンに達した。東京の町は火の海となり、家屋二万七千軒以上が焼け、市民八万四千人が死亡、百万人を超える市民が被災した。

三月十三日の深夜には、四時間近くにわたって大阪が空襲を受けた。数次に襲ったB-29は計五百五十機に及んだ。上空二千米メートルの低空から一般家屋をねらってクラストー焼夷弾が落とされた。これにより約五千人の死

者・行方不明者が出た。

爆撃は十二日名古屋、十四日大阪、十七日神戸と連続し、アメリカ軍が日本本土を焦土化する作戦が明らかになった。しかし迎撃に飛び立つ戦闘機は数少なく、B-29には高射砲も届かなかった。

設計・試作の段階にあった本土防衛用の局地戦闘機「烈風改」、夜間戦闘機「電光」、陸上戦闘機「陣風」、高速戦闘機「火龍」「震電」、特攻機「桜花」、哨戒爆撃機「大洋」、対潜哨戒攻撃機「東海」、重戦車「カト」「ホリ」などは木っ端微塵に破壊されていった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

空母「信濃」 しなの・大和型戦艦の三番艦として建造されていたが、ミッドウエー海戦で喪失した空母の穴を埋める目的で空母に改造された。通常の空母というより「洋上移動航空基地」という発想が強かった。源田實の第一航空艦隊構想を船で実現したかった。だった。

八百キロ爆弾の水平爆撃にも耐えられるよう防御が施され、「大鳳」と同様に飛行甲板に七十五ミリ装甲板が張られた。四四年十一月二十九日、横須賀から呉に回航していたとき、浜名湖の南方沖合いでアメリカ海軍の潜水艦「アーチャーフィッシュ」が放った魚雷四本が右舷に命中し、和歌山県潮の岬南方四十八キロで転覆・沈没した。

源田 實 げんだ・みのる／1904～1989。海軍兵学校五十二期(一九二四年卒)、二七年海軍砲術学校を経て霞ヶ浦海軍航空隊に入った。日中戦争で日本の制空権確立に貢献したあと十二式戦闘機(のち零式艦上戦闘機)の開発に参画した。真珠湾攻撃、ミッドウエー海戦では旗艦・空母「赤城」に参謀として乗艦した。大艦巨砲主義に立たず航空機の戦略的活用を本意とした。

台湾沖航空戦 このときアメリカ海軍はレイテ上陸作戦を前に日本軍の航空兵力の撃滅をねらいハルゼー大將が率いる第三十八任務部隊をもって日本軍航空機をおびき出した。暗号解読によって日本軍の動きは逐一知られていた。日本軍は戦略的な罠に落ちたのである。

第三十八任務部隊 正規空母九、軽空母八、戦艦六、巡洋艦十四、

駆逐艦五十八、護衛空母十一、給油艦三で成っていた。日本軍航空機による被害は重巡洋艦「キャンペラ」と軽巡洋艦「ヒューストン」が大破したに過ぎなかった。

サンチ センチメートルと同義。明治初期、日本陸軍は兵制をロシアに学んだため兵器の単位などにドイツ語読みが定着した。これに対して海軍はイギリス流兵制だったためインチ、ポンドが使われた。

フィリピン沖海戦(レイテ沖海戦) フィリピン再上陸・奪回を目指すアメリカ軍と絶対防衛ライン死守をねらう日本軍が総力を傾けて戦った。十月二十四日のシブヤン海海戦、二十五日のサマール沖海戦、エンガノ沖海戦、スリガオ海峡夜戦など様々な名で呼ばれている。

帝国海軍は艦隊主力をレイテ湾に突入させる作戦だったが、「大和」の姉妹艦である超弩級戦艦「武蔵」、戦艦「山城」「扶桑」、空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千代田」「千歳」、重巡「愛宕」「摩耶」「鳥海」「筑摩」「鈴谷」「最上」、軽巡「能代」「多摩」「阿武隈」、駆逐艦「山雲」「朝雲」「満潮」「野分」「早霜」「藤波」「不知火」「秋月」「初月」などを失う結果となった。神風特別攻撃隊「敷島隊」がアメリカの護衛空母「セント・ロー」を撃沈したのはこのときだった。

四式重爆撃機「飛龍」 ひりゅう…全長十八メートル、全幅二十二・五メートル、最高速度五百三十七キロ/時、爆弾積載量一トン、十二・七ミリ機銃三基、二十ミリ機銃一基を備えていた。

局地戦闘機「烈風改」 れつぷうかい…零戦に代る次期主力戦闘機として四四年十月に完成した「烈風」をさらに大型化し、排気タービン過給器、三十ミリ砲を主翼に四、胴体後上斜めに二の計

六門を装備した。

**夜間戦闘機「電光」** でんこう…海軍試作丙戦闘機として最初から夜間戦闘を目的に開発された。機首にレーダー、三十ミリ機銃二基、二十ミリ機銃二基および遠隔操作式二十ミリ連装旋回機銃一基を装備する予定だった。全装備自重が約十トンという大型機で最高速度は六百六十九キロ/時を記録、四五年八月の完成を目標としたが同年六月の空襲で設計図、試作機のいずれもが全焼・破壊された。

**陸上戦闘機「陣風」** じんぷう…全長十・一二メートル、全翼幅十二・五メートル、自重三・五トンの単座式で、最高速度は六百八十五キロ/時、高度一万メートルで三千四百二十五キロを航続できる設計だった。主翼に二十ミリ機銃四ないし三十ミリ機銃二基、機首に十三ミリ機銃二基を装備した実物模型までできたところで終戦となった。

**高速戦闘機「火籠」** かりゆう…中島飛行機が設計を完了した段階で終戦を迎えた。

**高速・高高度局地戦闘機「震電」** しんでん…全長九・七六メートル、全翼幅十一・一一メートルで機体の最後尾にプロペラを置き、後退翼と垂直尾翼を百八十度回転させた設計だった。最高速度は七百五十キロ/時で爆弾二百四十キロを装着でき、三十ミリ機関砲四門、七・七ミリ機銃二基を装備した。

**特攻機「桜花」** おうか…火薬を爆発させて推力を得る火薬式ロケットで最高速度八百七十六キロ/時を達成した。一式陸攻ないし九七式艦攻で懸垂し、敵艦隊の近くで切り離して突入する特攻専用機として開発された。一千二百キロ爆弾に翼とロケットエンジンを付け、操縦できるようにしたといったほうが正しい。

**哨戒爆撃機「大洋」** たいよう…金属不足から機体を木製にしたものだったが、完成しないまま終わった。

**対潜哨戒攻撃機「東海」** とうかい…視界をよくするため機首をガラス張りにし、低空での哨戒と攻撃を安定させるため双発とした。九州飛行機が開発しわずかに実戦配備されたが十分な性能を発揮しないうちに終戦となった。

**重戦車「カト」** ソ連軍の重戦車「スターリン」との決戦を想定して開発が進められた。口径百五ミリの対戦車砲を固定装備し射程一千メートルで厚さ二百ミリの鋼板を打ち抜くことができた。連合国軍の主力戦車「M4」が相手であれば一撃で宙に吹き飛ばしたとされる。

**重戦車「ホリ」** カトと同じく百五ミリ砲を搭載し、砲塔が回転する方式を採用し、かつ前面装甲の厚さを百二十五ミリにして防御力を強化した。満州におけるソ連機械化部隊および本土決戦を想定して設計されたが、鉄鋼の不足から実現には至らなかった。

# 日本IT書紀 071 P L A N & D O

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。